

## 朝鮮通信使が出会った「粟屋の娘」を巡って

—申維翰『海游録』の記事を手掛かりとして—

盧 桂 順

### はじめに

朝鮮通信使は一六〇七年から一八一一年まで十二回訪日した。その「使行録」は約四〇編を数えるが、中には日本女性の姿を生き生きと描いた申維翰の『海游録』（一七一九年来聘）がある。

通信使来聘時の人数は毎回約三〇〇名〜五〇〇余名で使節団は全て男性で構成されていた。勿論、応接した日本側の幕臣や各藩の藩士たちも全て男性であった。

しかし通信使一行を見物した日本人の中には、少なからぬ女性たちがいたことがいくつかの文献や絵画に残されている。

たとえば、尾張・渥美郡田原藩に残る『田原藩日記』（第六卷）「五一萬留帳」によれば、一七六四年（宝暦十四）、江戸に上る第十一回通信使の一行を見物するために田原藩主・三宅康之の娘、お民がお付きの者四人を連れて何日も前より宿を取って待機し、通信使の行列を観たとの記録がある<sup>1)</sup>。

また、通信使の行列を描いた各種の「絵図」にも多くの女性観衆の姿が見える。仲尾宏『後桜町天皇宸記』の朝鮮通信使記事<sup>2)</sup>では一七六四年（宝暦十四）後桜町天皇の女官たちが江戸より帰路の通信使行列を見物し、それらの様子を天皇に報告していることが記されている。そのとき天皇は幕府の老中を通して通信使からの進上物である高麗人参や繻子などを受け取ったという。

さて一七一九年（享保四）第九回通信使の製述官であった申維翰は江戸への往復中、見物人のなかの日本女性を観察し『海游録』に詳しく記録している。

たとえば彼は、沿道に座っている女性たちを見て「女性は艶やかな黒髪に花簪、べっ甲の梳を挿し、顔には脂粉をほどこしている。・・・紅緑彩画の長衫を着、宝帯を腰に束ね、腰は細くて長い。・・・仏画のごとくである」と書いている。そして女性が笑う様子を「その笑い声は琅然（玉のごとく）、細きこと、あたかも鳥の声のようだ」と描いている。また浪華（大坂）では蘆花町（現大阪市西区堀江辺り）の娼屋や妓院を見て国中の美人が多く集まっているようだ」と述べている。

さらに京都では煎茶を振舞ってくれた茶姫の玉のような美しい顔と黒い髪はさながら画中の人に似る、と褒め称えている。<sup>③</sup>

この他にも江戸への往路・京都から大津、峠を越えた村落の人家や酒屋の女子たちは必ず化粧をし鮮やかな服装を身にまとった、美女が多いところだと記している。<sup>④</sup>

このように彼の日本女性に対する印象はすこぶる良い。そして申維翰は江戸での国書交換の一連の儀式を終えた帰路、周防国上関において「粟屋の娘」に出会っている。

本論はその「粟屋の娘」が如何なる女性であったかを考察

する。

## 1. 申維翰が出会った「粟屋の娘」

一七一九年（享保四）十一月二十九日（旧暦）江戸からの帰途、周防の上関で食事をとった後申維翰はこの地の書生たちと対話をしている。そしてそこに同席していた少女の姿を次のように記している。

有称粟屋氏女子。年令十一歳。能書大字。呈数紙於館中。筆用弘法体。書軟如殭蛇。雖不成様。而一幼女辯之。亦自異事。余為小序題其首以還之。<sup>④</sup>

その中に粟屋の娘と称する娘あり。年令は十一歳。よく大字を書し、数枚を館中に呈す。筆法は弘法体を用いている。書（字）は倒れた蛇の如くに柔らかく様を成さぬが、一幼女にしてこれを弁ずるは又、おのずからめずらしい事である。余は小序（序文）を作り、その首に題して返した。（姜在彦訳『海游録』一二五七頁）

申維翰は大人の男性たちに混じってたったひとり、少女がいた事にまずは驚いたのではないだろうか。文面から見

て申維翰は平仮名を解さないはず。見せられた書はおそらく漢字であろう。又、彼は日本の高僧・弘法大師空海の書を既に知っていたと思われる。少女の書は大人のそれと比べる事はかなわれないが難しい漢字で書かれたものを見て序文まで書き添えて返しているのである。余程印象に残ったのであろう。

## 2. 儒家―戸川整齋と長州藩の教育

ではまず栗屋の娘を連れて来たのは誰なのかという疑問から考察する。当時の長州藩における儒学・学問の発展や活発さを鑑みると、『海游録』に登場する小倉尚齋、もしくはその門下生ではないだろうかと考えられるが、彼らは女性を伴って通信使一行と対面したとは限らない。他方で岩国藩の教育制度確立と深く関係する人物として戸川整齋の存在がある。まずこの人物を考察する。

岩国藩は毛利元就の二男・元春が吉川家の養子となり関が原の合戦の後、元春の三男広家が周防国岩国に移封された。その後明治の廃藩まで十三代続いた支藩である。藩祖・広家は水田耕作の改良や紙の生産等で経済的基盤を確立した人物である事が分かっている。また教育、学問を重視し人材育成に力を入れていたことも明らかになっている。

戸川整齋は岩国藩三代藩主・吉川広嘉のときの儒家・宇都宮遯庵の弟子である。宇都宮遯庵は藩の意向にそって多くの学者を育てた。その中のひとり戸川整齋である。のちに整齋は藩の公文書の責任者、祐筆としての地位に就いた。そして藩の教育者としても優れた人材を多く育てたと『岩国沿革志・能書家略伝』（明治三十年代頃編著）に記されている<sup>6)</sup>。

周知のように江戸時代、日本の教育制度は徳川家康の頃より八代將軍吉宗の享保の改革をはじめとする「文治政治」にも見られるように封建社会を支える教学としての儒学、わけでも朱子学を奨励している。

幕府直轄の昌平黌・昌平坂学問所の設置はもとより秋田藩の明德館をはじめ、萩藩の明倫館を含む全国二十四箇所に藩校が設立された。その後続いて多数の私塾ができ旗本、御家人、藩士、浪人、郷士らも学んだ。他に民間の寺子屋・郷学も多数設立され、当時江戸府内だけでも寺子屋で身を立てる者が八百人いたという。

石川謙『近世日本社会教育史の研究』<sup>7)</sup>によれば、「正徳・享保の間にて庶民教育が確乎たる方針をもつようになった」という。それらの内容は主に「諸善衆徳、五倫五常教育（父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信とされる仁・義・礼・知・信）で、武士以外の女子も教育

の対象」とある。これは地方においても上級の武士教育のみならず、下級武士の子女教育も盛んであったことを示唆している。

戸川整斎は当時自分の私塾で学んでいた多くの少年・少女の中でも特別に書が上手で聡明な少女であった粟屋の娘を通信使に会わせたとと思われる。彼は自分の書も通信使の一行に見てもらおうと、このときの書記・成夢良に会い自分の書『篆分草隸』を見せ高く評価されている。成夢良は、事前に雨森芳洲を通じて戸川整斎の書と共に、「粟屋の娘」の書を見ており整斎が彼女の師であることを知り納得したという。この時、粟屋の娘の号が〈文蘭〉であったことも判明している。<sup>8</sup>

教育が盛んに奨励されたこの時期、下級武士の娘である粟屋の娘も女子でありながら私塾で学んでいた事は、さほど不自然な事ではなかったのである。

### 3. 戸川整斎が連れて来た「粟屋の娘」は誰の娘であったか？

『御家中系図』（岩国徴古館蔵<sup>9</sup>）によれば、「曾祖父の粟屋又兵衛正則（五十石）、祖父・清右衛門喜次、父・又兵衛貞次。貞次の子・一男三女の次女、正理院に仕えた長岡」というくだりがある。そして、貞次の子として「女」と記

されている。

この文中にみえる正理院とは、岩国藩五代藩主・吉川広達<sup>なち</sup>の側室（のちの正室）のことだが、その奉公人として粟屋の女子が城に上がり、正理院が八十六歳で亡くなる一七八一年（天明元）三月九日まで仕えたのである。

娘は一七一九年（享保四）当時、十一歳であるから、一七〇八年（宝永八年）生まれであろう。死亡年は一七九三年（寛政五）、八十六歳という記録が残っている。しかし『御家中系図』には「女子」と記しているが、名前は明記していない。

名前が明らかになるのは次の文書に拠るものである。

それは『宝暦五<sup>乙</sup>亥<sup>亥</sup>年御二方様、御歳賀記―名嶋弥五兵衛、左之通持参之覚書』には次の記述である。<sup>10</sup>

（略）

正理院様附 御老女―萩野・直木

中老―すが・ふさ・みを・くま・りつ・

うた

御小性―みき・つゑ・ひやく

御次女中―とま・なを・つて・せき・

さな

御中居―中・かけ橋

御端女―千尋・小手巻（後略）

ここに初めて「粟屋の娘」、すなわち粟屋又兵衛貞次の次女、名前は「ふさ」又は「おふさ」の名が登場する。

本論では、この「中老」であった「ふさ」が粟屋の娘であったとする理由を考察する。

なお、岩国藩では老女役の役名は、長岡・萩野・直木・

葉山・洪岡・三保崎と定められており、老女以下は本名で呼ばれていたようである。

こうした史料から、ふさも初めは端女から始まり、女中として仕えたことがわかる。ここで粟屋の娘の名が「ふさ」または「おふさ」であり、後には中老にまで進んだ女性であったと判明した。

#### 4. ふさの生涯

岩国藩『御家中系図』<sup>12)</sup>より、

(略)

女子 御奉公 長岡（長岡とは老女としての役職名）

正理院様（経永母・広達妾栗原宗順女）御一生奉公仕

御老女役相勤。

都而五十九ヶ年之間被 召仕、御逝去之御

御届迄 毛被差免、右、多年之被 对 功勞

彼者エ被 下置候御扶持方、高二直シ被 下、

在懸り五十石エ引結、五十三石六斗被

仰付 候也、寛政五年丑十一月十四日死

正理院様に一生御奉公仕り御老女役を相勤めた。藩主

『岩邑年代記』「享保十六辛亥 三月十日」

（前略）御裏御老女萩野事祖式長左衛門娘也、上方へ

御代參被差上候。上女中之内おふさ粟屋又兵衛娘、端

女兩人一人ハ川戸ノ半左衛門娘、一人ハ□□、一同二

被差上、萩野へ五百疋・おふさへ三百疋、端女銀貳両

ツ、被遣候（後略）

老女の萩野は祖式長左衛門の娘で、上方へ代參をこう

むり候。上女中のおふさは粟屋又兵衛の娘で、端女兩

人、一人は川戸の半左衛門の娘で、もう一人は□□、

二人ともにお仕えいたした。そして萩野に五百疋、

おふさに三百疋、端女に二両が与えられた

は五十九年間仕えた長岡に、正理院様御逝去のみぎり、御見届迄も許した。右、多年の功勞に對して彼者（長岡）へ下し置かれた御扶持は高に直して、現在の石高五十石に合算して、五十三石六斗に仰せ付けられた。寛政五丑年十一月十四日死す。

ふさは端女（端女Ⅱ召使）として城に上がり、修行を積んだ後、二十二歳頃から正理院に仕えたようだ。そして奉公人として、最後は最高の地位である御老女となり、正理院の死までも看取ったばかりか没後の御見送りまで許されたようである。

正理院亡き後屋敷が取り払われたのち、ふさはもう一人の御老女役の浅香と共に剃髪をしている。彼女等の五十九年間の功勞は高く評価されふさは役職手当の名目で一人扶持・米一石八斗（高に直して三石六斗）を賜っている。その功はふさの死去後も認められ、それらは粟屋家従来の石高五十石に加算された。合わせて五十三石六斗を賜り粟屋家の石高は四代ぶりに上った。これは特別功績のある場合のみに認められることである。当時下級武士が得ることが出来る石高としては破格の待遇でもある。また生涯独り身であったふさは正理院の死後、帰る処がなかったこともあり、特別に自身の家を建てることも許された。粟屋の家督

はふさの死後も粟屋利兵衛安光に相続された。

このようにして、ふさ自身は与えられた職務を全うし、藩の高い評価を受け、又生涯困らぬ報酬をうけていたことが窺える。

### まとめ

以上で見えてきたように、第九回の通信使、即ち一七一九年（享保四）朝鮮通信使の製述官であった申維翰の『海游録』に記されていた「粟屋の娘」が岩国藩の下級武士・粟屋家の次女であり、名を「ふさ」であったことが明らかになった。つまり『海游録』に記されるように申維翰にとっては印象深い出会いであったということであろう。これは通信使史上希有で貴重な挿話であるといえよう。

申維翰は何より日本では女子も幼い頃から男子に混じって文字を学んでいることに驚いたのではなからうか。そうして少女たちが文字を解し文章を書くことが出来る様子を見ることによって、江戸時代中期の日本の教育が整っていることに認識を新たにしたのではないだろうか。

なぜなら朝鮮王朝時代は「男女七歳にして席を同じうせず」という原則があり、両班支配層の息女であっても家庭で父や男兄弟の傍らで学ぶことはあるが公式に男女共学は

認められておらず、元より女子を受け入れる学び舎が存在しなかったからである。

ともあれふさは文字をよく知り書を能くすること、朝鮮の碩学である申維翰と出会い、己の書の序文まで贈られた。その後長州藩主の正室に仕える老女にまで昇進したのであるから日朝善隣友好の華としての希有な存在といえよう。

(ノ) ケスン 大谷大学非常勤講師)

註 (1) 『田原藩日記』(宝暦十二年〜明和九年) 第六卷 田原町

文化財保護審議会編集 宝暦十四甲申年正月「萬留帳」

条。「一お民様昨朝鮮人吉田宿出立、二川宿ニ而寛寛

御見物被成、昨夜五ツ時過御機嫌好御帰之由」(一二四頁)

一九九四年 田原町文化財保護審議会編集 教育委員会

(2) 仲尾宏『後桜町天皇宸記』朝鮮通信使記事『朝鮮通

信使研究部会報』第14号)

(3) 申維翰『海游録』(二一九年九月一日二六〇頁)「列

肆茶姫。玉面。鴉髮。手按神仙爐煎茶以待者。宛似画中人」

(4) 申維翰『海游録』(一七一九年九月一日三〇六頁)

(5) 森高雲『図説 書法用語詳解』木耳社刊 一九九七年

中西慶爾『中国書道辞典』木耳社刊 一九八一年

弘法大師空海の筆法は中国東晋の王羲之や顔真卿の影響を受けたものであり、書体は「飛白体」。これは後漢の蔡邕(一三二〜一九二)が鴻都門を修復する工人の塗料

を塗っているのを見てヒントを得て、刷毛で字を書くことを考案したとされる。「飛白体」とは糸髪のようなところを白といい、勢いが飛挙するのを飛という。空海の書としては最澄にあてた書状三通「風信帖」「真言七祖像」が東寺に、「灌頂歴名」が高雄山神護寺に残っている。これらは全て漢字である。

(6) 藤田葆『岩国沿革志』「能書家略伝」岩国徴古館蔵

「戸川幸太夫しげすけ威佐字文敬 通称平馬 助八郎 幸

太夫 元祖又右衛門ト云(中略) 威佐ハ役局ニ居テ御

用立シナリ是ヨリ先凛雲廣達公御参府御共ヲモ右筆役ニ

テ勤メタリ」(享保一年丙子条)

(7) 石川謙『近世日本社会教育史の研究』青史社刊 一九三

四年(三六六〜三六九頁)

(8) 藤田葆『岩国沿革志』「能書家略伝」「能書家伝・享保四

年歳次己亥初冬日整齋戸川」岩国徴古館蔵

「略」又故邑門人粟屋氏女文蘭十一歳、墨蹟先人高賢(後

略)

「朝鮮人成夢良文(中略) 芳洲雨伯陽持岩国十二歳女子

粟屋氏呈蹟一軸来示(後略)」

(9) 『御家中系図』「粟屋氏系図 粟屋又兵衛正則家系一覽」

岩国徴古館所蔵 参照(安政三年丙辰附 御家老中老)

「一又兵衛貞次(家督隠居年領共不相分)

一女子(御奉公 長岡

正理院様御一生御奉公仕御老女役相

都而五十九ヶ年(略)

(10) 『宝曆五乙亥年 御二方様 御歳賀記』 岩国徴古館蔵

参照

(11) 『岩邑年代記』(享保十六年三月十日) 岩国徴古館蔵

参照

(12) 岩国藩御家老中老『御家中系図』(安政三年丙辰附 御

家老中老

岩国徴古館蔵参照